

マーケットの動き（2022年11月28日～12月2日）

先週の国内株式市場は、前週末比で下落しました。

週の前半は、FRB（米国連邦準備制度理事会）パウエル議長の講演を前に積極的な売買が手控えられるなか、中国の新型コロナウイルス感染拡大に対する懸念から軟調に推移しました。その後、国内株式はFRBパウエル議長が利上げペースの鈍化を示唆したことで米国株式の上昇に追随しましたが、円高の進行を受けて輸出関連株を中心に下落に転じて週を終えました。

投資環境見通し（2022年12月）

国内株式相場は一進一退の動き

企業業績は、供給制約の緩和による生産活動の回復に加え、全国旅行支援などの政策対応やインバウンド需要拡大による内需押し上げが期待されるものの、世界的な景気後退懸念や円安の動きがすでに一巡していることもあり、目先の悪化に対する懸念も残っています。国内株式相場は、インバウンド需要の順調な回復に加え、自動車産業の中国での挽回生産と波及効果が押し上げ材料とみられますが、円安の動きはすでに一巡しており、足元の新型コロナウイルス感染拡大に伴い内需や生産活動が停滞することも懸念されることから、当面は一進一退での動きになるとみています。

	12月2日	騰落率			
		前週比	1カ月前比	6カ月前比	1年前比
TOPIX（東証株価指数）	1,953.98	▲3.17%	0.70%	1.43%	1.43%
日経平均株価	27,777.90	▲1.79%	0.41%	1.33%	0.09%

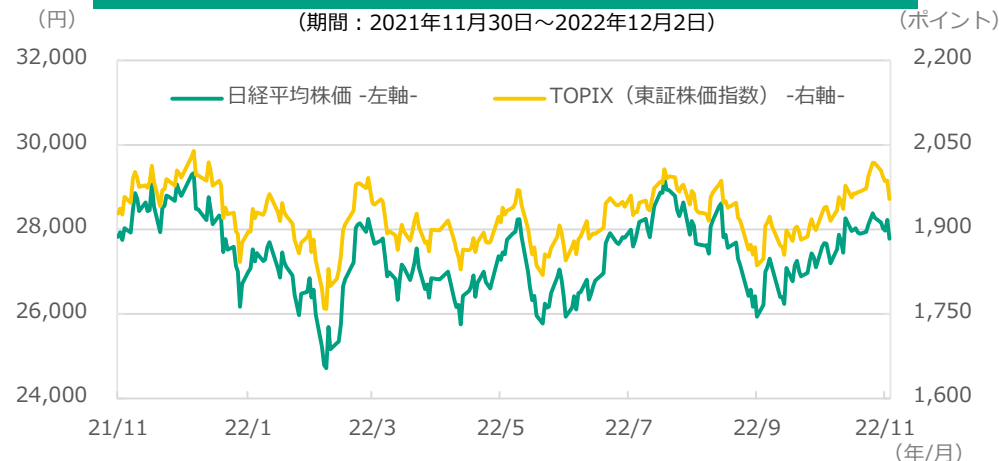
※期間別騰落率の各計算期間は、基準日から過去に遡った期間の応答日(休日の場合は前営業日)までとします。

※最新の「投資環境見通し」もご覧ください。

https://www.myam.co.jp/market/outlook/upload_pdf/202212_outlook.pdf

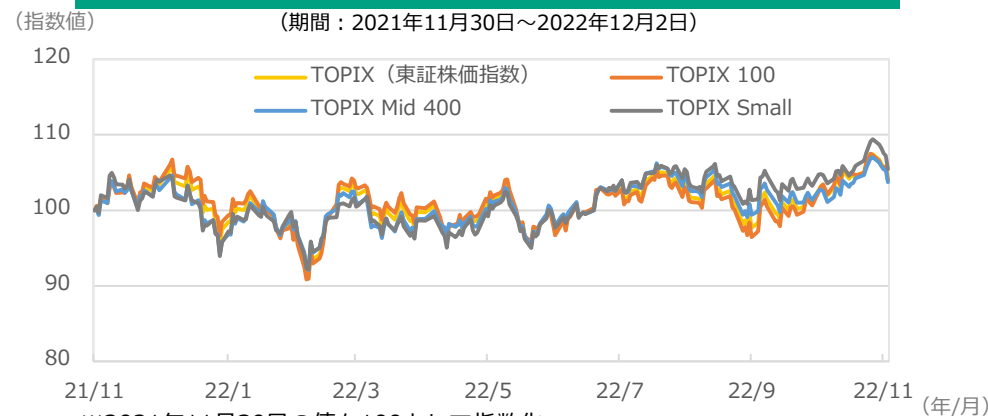
日経平均株価、TOPIXの推移

（期間：2021年11月30日～2022年12月2日）



TOPIX規模別指数の推移

（期間：2021年11月30日～2022年12月2日）



※2021年11月30日の値を100として指数化

※出所：FactSetのデータを基に明治安田アセットマネジメント作成

●当資料は、明治安田アセットマネジメント株式会社がお客さまの投資判断の参考となる情報提供を目的として作成したものであり、投資勧誘を目的とするものではありません。また、法令にもとづく開示書類（目論見書）ではありません。当資料は当社の個々のファンドの運用に影響を与えるものではありません。●当資料は、信頼できると判断した情報等にもとづき作成していますが、内容の正確性、完全性を保証するものではありません。●当資料の内容は作成日における当社の見解に基づいており、将来の運用成果を示唆あるいは保証するものではありません。また予告なしに変更することもあります。●投資に関する最終的な決定は、お客さま自身の判断でなさるようお願いいたします。●当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらに関する著作権等の一切の権利は、それらを作成・公表している各主体に帰属します。●使用インデックスについては、マーケット見通し（総合）の最終ページをご確認ください。<https://www.myam.co.jp/market/report>

マーケットの動き（2022年11月28日～12月2日）

先週の米国株式市場は前週末比で上昇しました。

FRB（米国連邦準備制度理事会）高官が金融引き締めに関する積極的な発言をしたことが重荷となり、週初は低下基調で推移しました。その後、中国のゼロコロナ政策微調整に対する期待や、FRBパウエル議長が利上げペース鈍化を示唆したことに加え、先週発表の主要経済指標が強弱入り混じる結果であったことから、米国株式は下げ幅を回復して週を終えました。

欧州市場もおおむね米国に連動した推移となりました。

投資環境見通し（2022年12月）

外国株式相場は一進一退の動き

企業業績については、これまでの高インフレや各国中央銀行の金融引き締めを受けて、業績見通しの下方修正が進みやすく、株式相場の重しになると考えられます。一方で、金利先高観測がやや後退する中、米国株式相場はドル高一服や在庫調整の進展、早期の人員削減などによる来期以降の業績底入れ期待に支えられ、一進一退で推移するとみています。また、欧州株式相場は天然ガス供給の不確実性や財政拡張懸念によるインフレ観測が広がる一方、景気後退懸念を受けた金利先高観測の後退に支えられ、一進一退で推移するとみています。

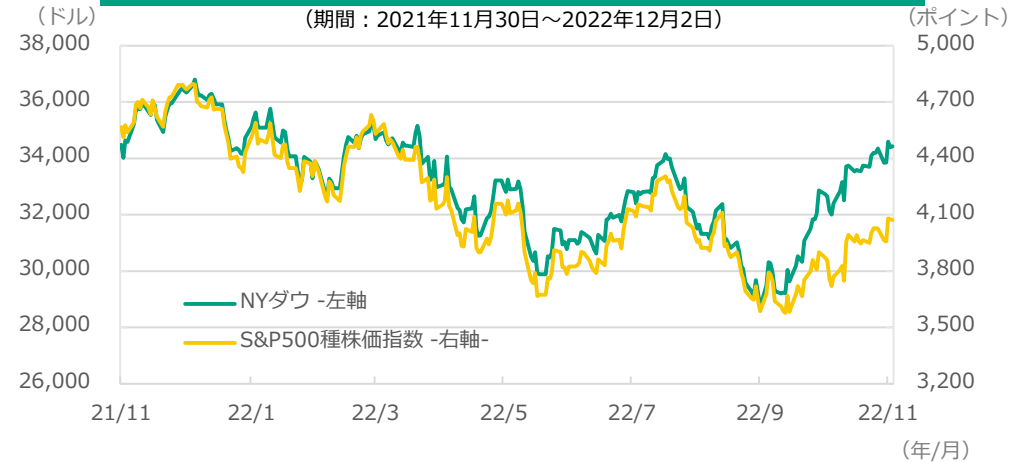
	12月2日	騰落率			
		前週比	1カ月前比	6カ月前比	1年前比
S&P500種株価指数	4,071.70	1.13%	8.30%	▲2.52%	▲11.04%
NYダウ	34,429.88	0.24%	7.10%	3.55%	▲0.61%

※期間別騰落率の各計算期間は、基準日から過去に遡った期間の応答日(休日の場合は前営業日)までとします。

※最新の「投資環境見通し」もご覧ください。

https://www.myam.co.jp/market/outlook/upload_pdf/202212_outlook.pdf

米国株価指数の推移



主要国株価指数の推移



※2021年11月30日の値を100として指数化

※出所：FactSetのデータを基に明治安田アセットマネジメント作成

●当資料は、明治安田アセットマネジメント株式会社がお客さまの投資判断の参考となる情報提供を目的として作成したものであり、投資勧誘を目的とするものではありません。また、法令にもとづく開示書類（目論見書）ではありません。当資料は当社の個々のファンドの運用に影響を与えるものではありません。●当資料は、信頼できると判断した情報等にもとづき作成していますが、内容の正確性、完全性を保証するものではありません。●当資料の内容は作成日における当社の見解に基づいており、将来の運用成果を示唆あるいは保証するものではありません。また予告なしに変更することもあります。●投資に関する最終的な決定は、お客さま自身の判断でなさるようお願いいたします。●当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらに関する著作権等の一切の権利は、それらを作成・公表している各主体に帰属します。●使用インデックスについては、マーケット見通し（総合）の最終ページをご確認ください。<https://www.myam.co.jp/market/report>

マーケットの動き（2022年11月28日～12月2日）

先週の国内債券市場は、前週末比で金利はほぼ横ばいとなりました。

週の前半は、FRB（米国連邦準備制度理事会）高官が金融引き締めに積極的な発言をしたことから、FRBが大幅な利上げを継続するとの見方が強まり、国内金利に上昇圧力がかかりました。週の後半は、FRBパウエル議長の講演後に米国金利の低下が進み、国内金利も低下基調となりましたが、下げ幅は限定的となり前週末とほぼ同水準で週を終えました。

クレジット市場は、軟調な地合いが継続しました。

投資環境見通し（2022年12月）

国内長期金利は、日銀の許容する変動幅の上限近辺で推移

海外においては利上げペース鈍化の動きに加えて金融引き締め政策からの転換時期が意識される一方、国内においては日銀総裁の任期満了が近づくにつれて将来的な金融政策の修正観測が根強い中、国内長期金利は引き続き日銀が許容する変動幅の上限近辺で推移するとみています。

	12月2日	変動幅（騰落率）			
		前週比	1カ月前比	6カ月前比	1年前比
10年国債利回り（日本、%） （変動幅）	0.25	▲0.00	▲0.00	0.01	0.19
NOMURA-BPI総合 （騰落率）	371.93	▲0.06%	▲0.03%	▲1.90%	▲4.03%

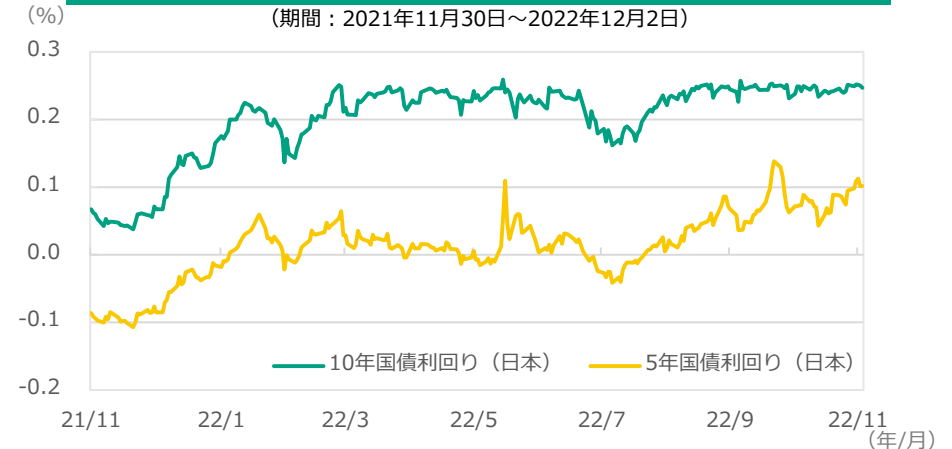
※期間別騰落率の各計算期間は、基準日から過去に遡った期間の応答日（休日の場合は前営業日）までとします。

※最新の「投資環境見通し」もご覧ください。

https://www.myam.co.jp/market/outlook/upload_pdf/202212_outlook.pdf

日本国債利回りの推移

（期間：2021年11月30日～2022年12月2日）



NOMURA-BPI総合指数の推移

（期間：2021年11月30日～2022年12月2日）



※2021年11月30日の値を100として指数化

※出所：FactSetのデータを基に明治安田アセットマネジメント作成

●当資料は、明治安田アセットマネジメント株式会社がお客さまの投資判断の参考となる情報提供を目的として作成したものであり、投資勧誘を目的とするものではありません。また、法令にもとづく開示書類（目録見書等）ではありません。当資料は当社の個々のファンドの運用に影響を与えるものではありません。●当資料は、信頼できると判断した情報等にもとづき作成していますが、内容の正確性、完全性を保証するものではありません。●当資料の内容は作成日における当社の見解に基づいており、将来の運用成果を示唆あるいは保証するものではありません。また予告なしに変更することもあります。●投資に関する最終的な決定は、お客さま自身の判断でなさるようお願いいたします。●当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらに関する著作権等の一切の権利は、それらを作成・公表している各主体に帰属します。●使用インデックスについては、マーケット見通し（総合）の最終ページをご確認ください。<https://www.myam.co.jp/market/report>

マーケットの動き（2022年11月28日～12月2日）

先週の米国国債市場は、前週末比で金利は低下しました（債券価格は上昇）。
FRB（米国連邦準備制度理事会）パウエル議長の利上げペース鈍化を示唆する発言や、10月の米国PCE（個人消費支出）の伸び鈍化、11月の米国ISM製造業景況感指数が市場予想を下回ったことなどをを受けて、米国国債が買われました。
ドイツ国債市場は、前週末比で金利は低下しました（債券価格は上昇）。

投資環境見通し（2022年12月）

長期金利は、米国、欧州（ドイツ）とも小幅に低下

米国：インフレ率は依然として高水準ながらピークアウトしたとの見方もあります。また、資源価格の上昇一服や住宅市場の調整に加え、景気悪化によって賃金上昇率が鈍化する可能性もあります。こうしたことから早期の利上げ停止や利下げに転換するとの見方もあり、長期金利は小幅に低下するとみえています。

欧州：需要の高まる冬季を迎え天然ガス供給の不確実性によるインフレ懸念が広がる一方、景気後退懸念からこれまで利上げを続けてきたECB（欧州中央銀行）に対して政策を転換するとの見方もあり、小幅に低下するとみえています。

	12月2日	変動幅（騰落率）			
		前週比	1カ月前比	6カ月前比	1年前比
10年国債利回り（米国、%） （変動幅）	3.51	▲0.18	▲0.54	0.60	2.06
FTSE世界国債インデックス 除く日本、円ベース（騰落率）	513.88	▲1.37%	▲2.28%	0.08%	0.19%

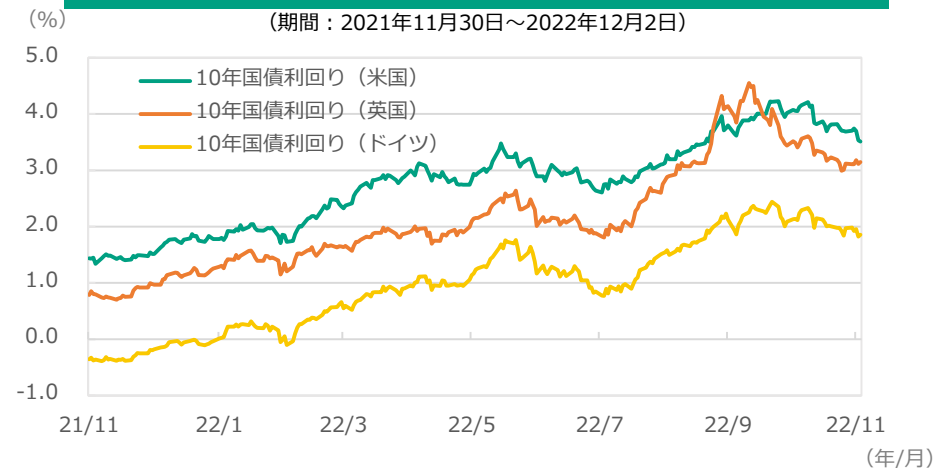
※期間別騰落率の各計算期間は、基準日から過去に遡った期間の応答日（休日の場合は前営業日）までとします。

※最新の「投資環境見通し」もご覧ください。

https://www.myam.co.jp/market/outlook/upload_pdf/202212_outlook.pdf

主要国国債利回りの推移

（期間：2021年11月30日～2022年12月2日）



FTSE世界国債インデックスの推移

（期間：2021年11月30日～2022年12月2日）



※2021年11月30日の値を100として指数化

※出所：FactSetのデータを基に明治安田アセットマネジメント作成

●当資料は、明治安田アセットマネジメント株式会社がお客さまの投資判断の参考となる情報提供を目的として作成したものであり、投資勧誘を目的とするものではありません。また、法令にもとづく開示書類（目論見書）ではありません。当資料は当社の個々のファンドの運用に影響を与えるものではありません。●当資料は、信頼できると判断した情報等にもとづき作成していますが、内容の正確性、完全性を保証するものではありません。●当資料の内容は作成日における当社の見解に基づいており、将来の運用成果を示唆あるいは保証するものではありません。また予告なしに変更することもあります。●投資に関する最終的な決定は、お客さま自身の判断でなさるようお願いいたします。●当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらに関する著作権等の一切の権利は、それらを作成・公表している各主体に帰属します。●使用インデックスについては、マーケット見通し（総合）の最終ページをご確認ください。<https://www.myam.co.jp/market/report>

マーケットの動き（2022年11月28日～12月2日）

先週の国内リート市場は、前週末比で下落しました。
米国のインフレ鈍化観測や円高の進行などを受けて、国内株式市場が軟調に推移するなか、国内リートも売られる展開となりました。
セクター別では、オフィスセクターや住宅セクター、商業・物流等セクターが総じて下落しました。

投資環境見通し（2022年12月）

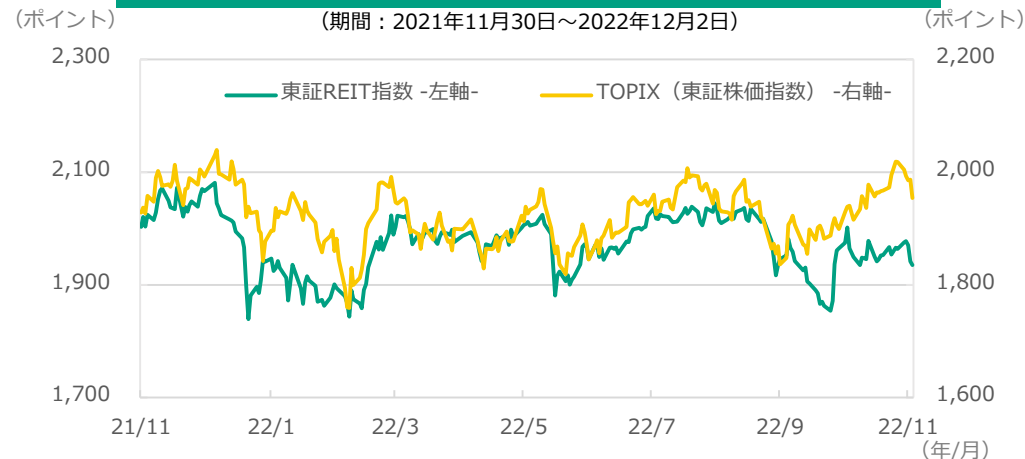
国内リート市場は、戻りを試す展開になると予想

国内外の人流が戻り、ホテルや商業施設、住宅の業績が回復するとみています。加えて、物流施設の業績が堅調で割安感が出ています。オフィスの稼働率の回復には時間がかかりますが、稼働率の低下に伴う収入の減少などを物件売却益や内部留保で補いながら分配金を維持している国内リートも多く、利回りを求める資金流入が期待されることから、米国の金融政策に対する不透明感が後退するにつれて国内リート市場は戻りを試す展開になると予想しています。

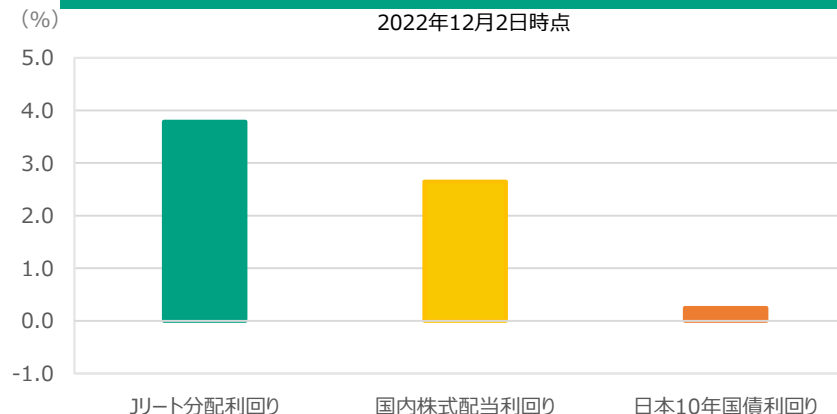
	12月2日	騰落率			
		前週比	1カ月前比	6カ月前比	1年前比
東証REIT指数	1,934.75	▲1.46%	▲1.52%	▲3.83%	▲3.41%
＜ご参考＞ TOPIX（東証株価指数）	1,953.98	▲3.17%	0.70%	1.43%	1.43%

※期間別騰落率の各計算期間は、基準日から過去に遡った期間の応答日(休日の場合は前営業日)までとします。

東証REIT指数、TOPIXの推移



国内各種資産利回り



※出所：FactSetのデータを基に明治安田アセットマネジメント作成

●当資料は、明治安田アセットマネジメント株式会社がお客さまの投資判断の参考となる情報提供を目的として作成したものであり、投資勧誘を目的とするものではありません。また、法令にもとづく開示書類（目論見書等）ではありません。当資料は当社の個々のファンドの運用に影響を与えるものではありません。●当資料は、信頼できると判断した情報等にもとづき作成していますが、内容の正確性、完全性を保証するものではありません。●当資料の内容は作成日における当社の見解に基づいており、将来の運用成果を示唆あるいは保証するものではありません。また予告なしに変更することもあります。●投資に関する最終的な決定は、お客さま自身の判断でなさるようお願いいたします。●当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらに関する著作権等の一切の権利は、それらを作成・公表している各主体に帰属します。●使用インデックスについては、マーケット見通し（総合）の最終ページをご確認ください。<https://www.myam.co.jp/market/report>

マーケットの動き（2022年11月28日～12月2日）

先週の為替市場は前週末比、米ドルは対円で下落（円高）しました。

週初は、FRB（米国連邦準備制度理事会）高官が金融引き締めに積極的な発言をしたことから、米ドルは139円台後半まで上昇しました。しかし、140円台を前に伸び悩むと、FRBパウエル議長が利上げペースの鈍化を示唆したことや米国のインフレ鈍化観測等を受けて円買い・米ドル売りが進み、米ドルは135円台前半で週を終えました。

ユーロは、前週末比、対円で下落した一方、対米ドルでは上昇しました。

投資環境見通し（2022年12月）

円に対して、米ドル、ユーロともにレンジ内での動き

米ドル：日銀とFRB（米国連邦準備制度理事会）との金融政策の方向性の違いがドルの上昇要因として継続するものの、FRBによる今後の利上げペースが鈍化するとの見方を背景に、ドルは円に対して上値は抑えられレンジ内での動きになるとみています。

ユーロ：日銀とECB（欧州中央銀行）との金融政策の違いがユーロの上昇要因として継続するとみられますが、欧州景気の先行きに対する懸念やECBによる今後の利上げペースが鈍化するとの見方を背景に、ユーロは円に対してレンジ内での動きになるとみています。

	12月2日	変動幅（円）			
		前週比	1カ月前比	6カ月前比	1年前比
米ドル/円	135.48	▲3.78	▲11.67	5.63	22.51
ユーロ/円	141.89	▲3.02	▲3.37	2.74	14.04

※期間別騰落率の各計算期間は、基準日から過去に遡った期間の応答日(休日の場合は前営業日)までとします。

※最新の「投資環境見通し」もご覧ください。

https://www.myam.co.jp/market/outlook/upload_pdf/202212_outlook.pdf

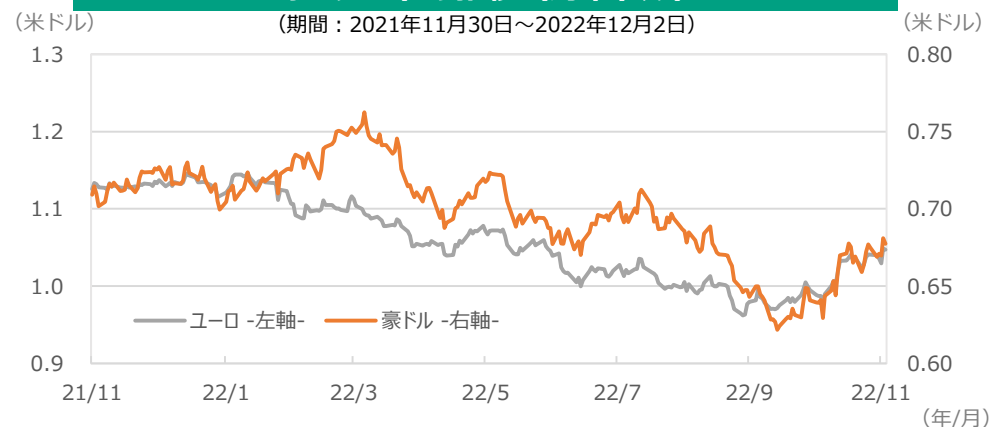
為替レートの推移（対日本円）

（期間：2021年11月30日～2022年12月2日）



為替レートの推移（対米ドル）

（期間：2021年11月30日～2022年12月2日）



※出所：FactSetのデータを基に明治安田アセットマネジメント作成

●当資料は、明治安田アセットマネジメント株式会社がお客さまの投資判断の参考となる情報提供を目的として作成したものであり、投資勧誘を目的とするものではありません。また、法令にもとづく開示書類（目論見書等）ではありません。当資料は当社の個々のファンドの運用に影響を与えるものではありません。●当資料は、信頼できると判断した情報等にもとづき作成していますが、内容の正確性、完全性を保証するものではありません。●当資料の内容は作成日における当社の見解に基づいており、将来の運用成果を示唆あるいは保証するものではありません。また予告なしに変更することもあります。●投資に関する最終的な決定は、お客さま自身の判断でなさるようお願いいたします。●当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらに関する著作権等の一切の権利は、それらを作成・公表している各主体に帰属します。●使用インデックスについては、マーケット見通し（総合）の最終ページをご確認ください。<https://www.myam.co.jp/market/report>

使用インデックスについて

●TOPIX は、株式会社 J P X 総研が算出する株価指数であり、日本の株式市場を広範に網羅するとともに、投資対象としての機能性を有するマーケット・ベンチマークで、浮動株ベースの時価総額加重方式により算出されます。TOPIX の指数値及び TOPIX に係る標章又は商標は、株式会社 J P X 総研又は株式会社 J P X 総研の関連会社（以下「J P X」といいます。）の知的財産であり、指数の算出、指数値の公表、利用など TOPIX に関するすべての権利・ノウハウ及び TOPIX に係る標章又は商標に関するすべての権利は J P X が有します。J P X は、TOPIX の指数値の算出又は公表の誤謬、遅延又は中断に対し、責任を負いません。

●東証REIT指数（配当込み）は、株式会社 J P X 総研が算出する株価指数であり、東証市場に上場する不動産投資信託（Real Estate Investment Trust）全銘柄を対象とした浮動株ベースの時価総額加重方式により算出されます。東証REIT指数（配当込み）の指数値及び東証REIT指数（配当込み）に係る標章又は商標は、株式会社 J P X 総研又は株式会社 J P X 総研の関連会社（以下「J P X」といいます。）の知的財産であり、指数の算出、指数値の公表、利用など東証REIT指数（配当込み）に関するすべての権利・ノウハウ及び東証REIT指数（配当込み）に係る標章又は商標に関するすべての権利は J P X が有します。J P X は、東証REIT指数（配当込み）の指数値の算出又は公表の誤謬、遅延又は中断に対し、責任を負いません。

●日経平均株価に関する著作権等の知的財産権、その他一切の権利は日本経済新聞社に帰属します。なお、日本経済新聞社は対象インデックスを用いて行われる事業活動・サービスに関し保証するものではありません。

●NOMURA-BPI総合はわが国の公社債市場全体の動きを捉えたものとして、野村證券株式会社により公表されている指数で、機関投資家等に広く利用されており、野村證券株式会社の知的財産です。野村證券株式会社は当社の個々のファンドの運用成果等に関し一切責任はありません。

●FTSE世界国債インデックスは、FTSE Fixed Income LLC により運営され、世界主要国の国債の総合収益率を各市場の時価総額で加重平均した債券インデックスです。このインデックスのデータは、情報提供のみを目的としており、FTSE Fixed Income LLC は、当該データの正確性および完全性を保証せず、またデータの誤謬、脱漏または遅延につき何ら責任を負いません。このインデックスに対する著作権等の知的財産その他一切の権利はFTSE Fixed Income LLC に帰属します。

●その他当資料にて使用したS&P500種株価指数、DAX指数、FTSE100、NYダウ指数の知的財産権、その他一切の権利は、それぞれ、スタンダード&プアーズ ファイナンシャル サービスズ エル エル シー、ドイツ取引所、FTSE社、S&P Dow Jones Indices LLCに帰属します。

●当資料は、明治安田アセットマネジメント株式会社がお客さまの投資判断の参考となる情報提供を目的として作成したものであり、投資勧誘を目的とするものではありません。また、法令にもとづく開示書類（目論見書等）ではありません。当資料は当社の個々のファンドの運用に影響を与えるものではありません。●当資料は、信頼できると判断した情報等にもとづき作成していますが、内容の正確性、完全性を保証するものではありません。●当資料の内容は作成日における当社の見解に基づいており、将来の運用成果を示唆あるいは保証するものではありません。また予告なしに変更することもあります。●投資に関する最終的な決定は、お客さま自身の判断でなさるようお願いいたします。●当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらに関する著作権等の一切の権利は、それらを作成・公表している各主体に帰属します。